

ペルシャ時代から初期ヘレニズム時代の キンネレット湖地域における交易活動

牧野 久実

Commercial Activity in the Lake Kinneret Region
from the Persian to Early Hellenistic Periods

Kumi MAKINO

本稿では、近年日本の調査隊によって発掘調査¹⁾が行われたキンネレット湖東岸のエン・ゲヴ遺跡から出土した土器群をもとに、キンネレット地域におけるペルシャ時代から初期ヘレニズム時代(紀元前539年～紀元前221年)の交易活動について考察を行う。

この時代の南レヴァントは、前後の時代に比べて遺跡の数も少なくその規模も小さいことから、歴史的断絶期としてこれまであまり研究されなかった。しかし、近年の新たな遺跡の発見やこれまで発掘されてきた遺跡の再検討の結果、遺跡が集中する地域が2カ所あることがわかつてきた。今回はそのうちの一つであるキンネレット湖地域を代表すると思われるテル・アナファとエン・ゲヴの土器資料を比較することによって、ヘレニズム化の前段階におけるキンネレット湖地域の状況がフェニキアの交易活動と深く関わっていたことを示す。

キーワード：エン・ゲヴ、アナファ、キンネレット湖、ペルシャ時代、ヘレニズム時代

Changes in the material culture of the Lake Kinneret region illuminate and help to explain the process of Hellenization in Ancient Palestine. This study is based on the results of recent excavations at the site of Ein Gev on the eastern shore of Lake Kinneret. Comparative study with the material from Tel Anafa, about 25 km north from the Lake, done by Dr. A. Berlin is also added.

In 1990, R. H. Smith pointed out a cultural break in the southern Levant during the Persian and early Hellenistic Period, when few remains are evident. However recent excavations of several sites, including Ein Gev, had revealed traces of human activity in these periods in two regions, the Eastern Mediterranean Coast and the Lake Kinneret region. Architectural remains and the material culture at some sites in the former region, especially at Tel Dor, reflect Phoenician commercial activity in these periods. So does the material culture of Ein Gev and Tel Anafa in the Lake Kinneret region.

An examination of the material change at Ein Gev and Tel Anafa from the Persian to the Hellenistic Period shows the following : 1) Hellenization as shown by an increase of imports from the Aegean world is only in the Late Hellenistic Period ; 2) Phoenician activity is observed from the Persian to the early Hellenistic Period ; 3) The Phoenician activity at Ein Gev seems to be more related to commerce, as objects such as Lebanese Transport Jars and Cypro-Archaic Import Jugs indicate, than at Tel Anafa, which, according to Berlin, is "likely an offshoot of nearby Phoenician settlements and source of caravan supplies", because Phoenician plainware household vessels are dominant.

These findings, which draw a different picture from the culture break noted by Smith, lead me to the hypothesis that there is a unique condition applicable only to the Lake Kinneret region whereby the advantages provided by the lake environment make the area suitable for indirect commercial activity as a hinterland of Phoenicia.

Key-words : Ein Gev, Anafa, Lake Kinneret, Persian Period, Hellenistic Period

はじめに

本稿では、近年、日本の調査隊によって発掘調査が行わ

れたキンネレット湖 (Lake Kinneret) 東岸のエン・ゲヴ

(Ein Gev) 遺跡から出土した土器群をもとに、キンネレッ

ト湖地域²⁾におけるペルシャ時代から初期ヘレニズム時代（紀元前539年～紀元前222年）の交易活動について考察を行う。

ペルシャ時代から初期ヘレニズム時代とは、いわば南レヴァントにおけるヘレニズム化の始まりの時代とも言える。ヘレニズム化とはギリシャ化、即ちギリシャ世界を中心とする西方との交流が活発化することを意味するが、実際に南レヴァントにおいてそれが顕著となるのは後期ヘレニズム時代（紀元前221年～139年）に入ってからである。そして、その過程を明らかにしようとする試みは、これまであまり行われておらず、ペルシャ時代から初期ヘレニズム時代の南レヴァントは、一般には文化的衰退期と考えられている。

その理由は、R. H. スミスが指摘したように（Smith 1990）、南レヴァントにおけるペルシャ時代から初期ヘレニズム時代の遺跡が、その前後の時代に比べて少ないためである。この点についてはすでに、D. ヴァッチンガー（Watzinger 1935: 3）や W. F. オルブライ特（Albright 1960: 142）が、ユダヤ人の本拠地ともいえる第一神殿がバビロニアによって崩壊し多くのユダヤ人がバビロンに奴隸として連れられたため、ユダの都市生活が一時的に途絶えたのだと説明している。K. M. ケニヨン（Kenyon 1960: 296-302）は、テル・エン・ナスベ（Tel en-Nasbeh）やサマリヤ（Samaria）から、明確な遺構は伴わないものの豊富な遺物が出土していることから、人々は小規模な村落で生活を続けていたとしている。

また、M. I. ロストフツエフ（Rostovtzeff 1941: 153）は、こうした事情に加えて、アレクサンダーの死後に各地で勃発した勢力争いが初期ヘレニズム時代の南レヴァントを荒廃させたと論じた。さらに、F. L. クーキー（Koucky 1987）は、気候の乾燥化に伴って自立的な小規模村落が一般的となったと説明している。いずれにしろ、こうした仮説を裏付けるほど十分な資料が明らかにされてこなかったために、ペルシャ時代から初期ヘレニズム時代の考古学的研究は立ち遅れてきたともいえる。

しかし、近年の調査によって、この時期でも遺跡の集中する地域が存在することがわかってきた（図1）。それはキンネレット湖周辺と地中海沿岸部である。これらの地域から出土した遺物や遺構はフェニキアの交易活動との関わりを示すものが多く、南レヴァントにおけるヘレニズム化の過程をみると興味深い資料である。特に文献史料がほとんどないこれらの時代、こうした考古資料からヘレニズム化の前段階について検討することは、南レヴァントにおけるヘレニズム化を理解する上で重要となっている。

遺跡の集中地域～地中海沿岸とキンネレット湖地域

1. 地中海沿岸の遺跡

ペルシャ時代における地中海沿岸地域は、フェニキアの活発な交易活動の拠点であった。E. スターン（Stern 1982: 238-243）は、当時の地中海沿岸部の諸都市の中で、アッコ以北とアシュケロンはティルス（Tyre）の、そしてドールからジャッファまでの南部はシドン（Sidon）のそれぞれ支配下におかれ、いわばフェニキアの植民地としての役割を担っていたと説明している。フェニキア人の交易活動のため、地中海沿岸部は内陸部よりも活発な居住活動が行われ、さらに、アレキサンダー死後の初期ヘレニズム時代にも、ピトレマイオス王朝が南レヴァントと共に南部・中央部フェニキアを支配したため、地中海沿岸部では、こうしたフェニキア諸都市との交易活動が引き続き活発に行われた。

そうした状況は、アッコ（Acco）、テル・アブハワム（Tel Abu Hawam）、ハイファ（Haifa）、シクモナ（Shiqmona）、テル・メガディム（Tel Megadim）、テル・ドール（Tel Dor）、テル・メボラク（Tel Mavorakh）、カエサリア（Caesaria）、テル・ミハル（Tel Michal）、ジャッファ（Jaffa）、ヤヴネ・ヤム（Yavne Yam）、テル・モール（Tel Mor）、アシュドド（Ashdod）、アシュケロン（Ashkelon）、ガザ（Gaza）、といった遺跡に見ることができる。これらの多くは、いずれも十分に計画された都市で人口が集中していた。特にドールでは、ペルシャ時代から後期ヘレニズム時代にかけて5つの文化層が確認されており、代表的な文化的変遷を見ることができる。

報告書³⁾によると、ドールはペルシャ時代の初期より、フェニキア人の商業都市として栄え、町はヒュポダムス（Hippodamus）と呼ばれる矩形プランで構成されていた⁴⁾。城壁は鉄器時代末のアッシリア式の凹凸式城壁がペルシャ時代を通じて維持されていたが、紀元前4世紀半ばにペルシャによって滅ぼされ、新たなフェニキア様式の城壁が建設された。それは切石の小口と長手を交互に置き、その内側に未成形の小石を詰めたもので、紀元前3世紀まで使用された。

初期ヘレニズム時代には、切り出した砂岩の小口を外側に向けて2つ並べおよそ1mの厚さに仕上げた新たなギリシャ式城壁が建てられた。また、およそ30mごとに矩形の塔が建てられ、城門もそれまでの2つの小部屋を備えたものから完全なギリシャ式城門へと変化した。さらに、町にはワインプレスや倉庫も備えられ、活発な商業活動が行われていたことを思わせる。

ペルシャ時代の土器としては、肩部がまっすぐで尖底の交易用の貯蔵壺や多種多様な壺、水差しが出土している。コリントス、ロードス、コス、クニドス、サモスといったギリシャ東部の島々から多様な装飾土器やワイン・アン

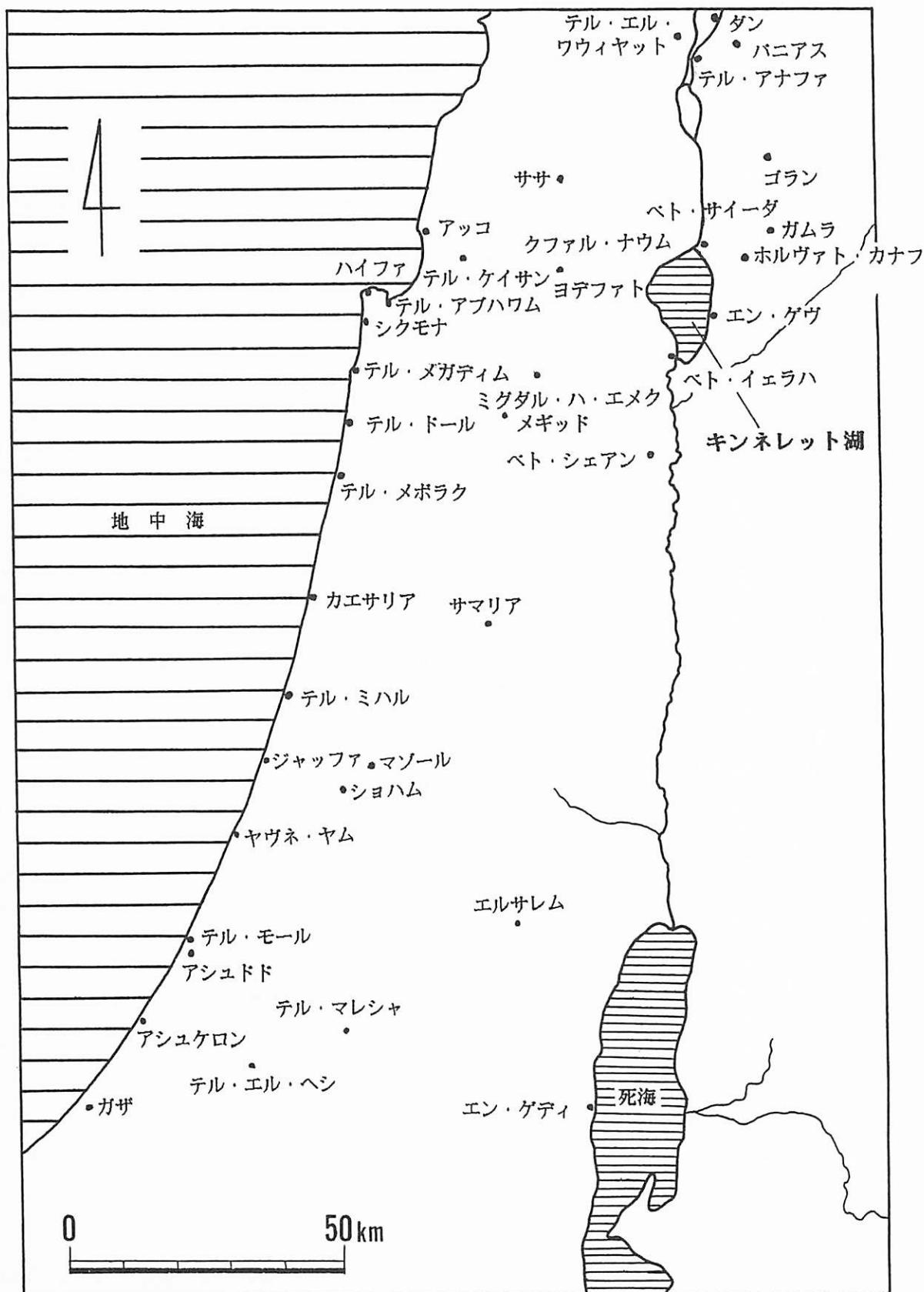


図1 ペルシャ時代～初期ヘレニズム時代の遺跡

フォラも多数運ばれ、ヘレニズム時代にかけてその数を増やしていった。また、アテネからはレキュトス(Lekythos)と呼ばれる白地に黒色で植物や幾何学模様を描いた香油容器や、黒色、後には赤色で人や動植物を描いたキュリクス(Kylix)と呼ばれる酒杯類などの容器が輸入された。アッティカ様式の装飾を模倣して南イタリアのマグナ・グラシア(Magna Graecia)で作られたクラテルも出土している。

ヘレニズム時代の土器は、その大半を輸入品が占めている。初期には、アテネを起源とし黒色陶器(Black Glazed Attic Earthenware)のひとつに分類されるフィッシュ・プレート⁵⁾やギリシャで作成されたキプロスのメガリアン・ボール(Megarian Bowl)⁶⁾、アテネ起源で白色の厚い塗装を施したウエスト・スロープ土器(West slope Ware)⁷⁾が、後期には、キプロスで作成された赤色のメガリアン・ボールや鮮やかな朱色の釉を施し磨き上げたテラ・シギーラタ(Terra Sigillata)⁸⁾が、多く出土している。さらに、オイルランプ、水差し、皿、椀、調理用器、クラテルといったフェニキア様式の日用品、ギリシャ本土やロードス、クニドスといったエーゲ海の島々から輸入された皿や椀、ワイン・アンフォラも出土している。

2. フェニキアの後背地としてのキンネレット湖地域

一方、もう一つの遺跡の集中地域であるキンネレット湖地域については、クレンゲルによってフェニキアとの関係が指摘されている(クレンゲル 1983: 266-268)。その根拠となるのは、以下のような旧約聖書の記述である。

「ソロモンが主の宮と王宮との二つの家を二十年かかって建て終わったとき、ツロの王ヒラムが、ソロモンの要請に応じて、杉の木材、もみの木材、および、金をソロモンに用立てたので、ソロモン王はガリラヤの地方の二十の町をヒラムに与えた」(列王記第一9章10-11)。

「あなたはツロに言え。海の出入口に住み、多くの島々の民と取り引きをする者よ。神である主はこう仰せられる。ツロよ。『私は全く美しい。』とおまえは言った。おまえの領土は海の真中にあり、おまえを築いた者は、おまえを全く美しく仕上げた。彼らはセニルのもみの木でおまえのすべての船板を作り、レバノンの杉を使って、おまえの帆柱を作った。バシャンの櫻の木でおまえのかいを作り、キティムの島々の檜に象牙をはめ込んで、おまえの甲板を作った」(エゼキエル27章3-6)。

クレンゲルは、前者をフェニキアの都市ツロがその後背地を広げる重要な事件、また後者をツロがキンネレット湖北東部のバシャン地方を商取引の地として認識していたことを示すものと指摘している。もしもペルシャ時代から初期ヘレニズム時代のキンネレット湖周辺における遺跡の集中が、フェニキアと関係するものであれば、クレンゲルが指摘したようなキンネレット湖地域におけるこうしたフェ

ニキアとの関係を考古学的に証明することにもなろう。

3. キンネレット湖地域の遺跡

キンネレット湖は、現在のイスラエル国北部で、アジア・アフリカ大地溝帯の最北端に位置する淡水湖である。その標準水位は、およそ海拔マイナス200mと淡水湖としては世界で最も低い位置にある。湖の周囲には平野が少なく、東側には高度差およそ500mに及ぶ急斜面が迫り、玄武岩でおおわれるゴラン高原につながっている。湖の西側は比較的なだらかで、南西部には石灰岩層が多く見られる。これらの地域にはキンネレット湖に流れ込む30以上の川筋が切り込み、また南へはヨルダン川という唯一の流出河川を通じて死海方面へ通じる。これらの川筋の多くは乾季に干上がるワジ(枯川)であるが、こうした川筋は古くから道として利用され、西は地中海へ、東はダマスカス経由でメソポタミアへ、北はシリア、レバノンへと、交流の世界を広げる役割を果たしていた。いわば、キンネレット湖地域はいくつかの文化圏を結ぶ交流点のひとつであったといえる。

こうしたことから、キンネレット湖地域では古くから交易活動が行われていた形跡が見られる。例えば、湖南のヨルダン川へ注ぐヤルムク川付近の土器新石器時代のシャール・ハ・ゴラン(Shar Ha-Golan)遺跡(紀元前6400年~紀元前5800年)では、地中海から運ばれた貝殻の加工品やシリア・アナトリアから運ばれた黒曜石製の石器が出土している(Garfinkel 1999: 41-42)。また、湖のすぐ南にあるベト・イエラハ(Beth Yerah)遺跡からは、この遺跡だけでは消費しきれない大量の穀物を納めるための穀物倉庫が発見されており、交易品としての保管場所であると考えられている(Mazar 1990: 127-129)。この遺跡からは初期青銅器時代の町の城門に置いた碇石も出土しており(Nun 1993: 28)、少なくとも紀元前3千年紀に湖上も含めた交易活動が行われていたことを暗示している。さらに、鉄器時代には北西岸のテル・キノロット(Tel Kinrot)、東岸のテル・ハダール(Tel Hadar)、そしてやや遅れてエン・ゲヴといった小規模な遺跡に、南レヴァントでは他にメギッド、ベト・シェアン、ハツォール、ベエル・シェバといった交通の拠点に立地する大都市にしか見られない巨大な穀物倉庫や列柱式建造物を伴う集落があった。列柱式建造物は、隊商のための馬屋、宿泊施設、倉庫などいくつかの仮説が立てられているが、いずれにしろ交易に関連する施設であると考えられている⁹⁾。

さて、キンネレット湖地域では、ペルシャ時代から初期ヘレニズム時代の遺跡としてこれまでにダン(Dan)、バニアス(Banias)、テル・アナファ(Tel Anafa)、テル・エル・ワヴィヤット(Tel el-Wawayat)、ササ(Sasa)、ベト・サイーダ(Beth Saida)、クファル・ナウム(Kfar Nahum)、

ヨデファト (Yodefat)、ミグダル・ハ・エメク (Migdal Ha-'Emeq)、メギッド (Megiddo)、ベト・イエラハ、ベト・シェアン (Beth Shean)、エン・ゲヴ、ホルヴァト・カナフ (Horvat Kanaf)、ガムラ (Gamla) において、ペルシャ時代からヘレニズム時代の遺物や遺構が発見されている。これらの遺跡は、地中海沿岸地域の遺跡に比べ小規模である。また、メギッド¹⁰⁾ やベト・イエラハ¹¹⁾ のように初期ヘレニズム時代の痕跡については、貨幣のみの出土しか報告されていなかったり、ホルヴァト・カナフ¹²⁾ やガムラといったゴラン高原の遺跡のように、初期ヘレニズム時代の文化層に関する具体的な報告がされておらず、その存在が曖昧な遺跡や、クファル・ナウム¹³⁾ やミグダル・ハ・エメク¹⁴⁾ のように初期と後期のヘレニズム時代が一括して報告され、初期ヘレニズム時代についての詳細な報告がされていない遺跡もある。しかしながら、テル・イツタッバ¹⁵⁾ やテル・エル・ワイヤット¹⁶⁾、ササ¹⁷⁾、ベト・サイーダ¹⁸⁾、エン・ゲヴ、テル・アナファ¹⁹⁾ では確実な建築面や遺物が、時に複数の層を伴いながら検出されており、その中にはテル・エル・ワイヤット、ヨデファト²⁰⁾ のように塔や城壁などの公共建造物も発見されている。さらに、ダン²¹⁾ とバニアス²²⁾ ではヘレニズム時代の祭祀の跡が見つかっている。

また特筆すべきは、ベト・サイーダで初期ヘレニズム時代から初期ローマ時代の層から粘土製の印章が出土しており、そこに葦の生える水面を行く船が刻まれていたことである (Arav and Freund 1995: 19-20)。この船はギリシャ人がフェニキア・ヒポス・ボートと呼んだタイプで、すでに鉄器時代より知られていたものである。これは浅瀬や岸辺の航行に適したフェニキア製の船で、恐らくこの周辺の湿地帯で使われていたものとされている。

こうした断片的な資料によって、当時のキンネレット湖地域におけるフェニキアの交易活動について知るには限界があるが、そのような状況の中でテル・アナファから出土した大量の土器とその分析結果は、当時のフェニキアとの関係を知るうえで貴重な資料となっている。これに加えて筆者が調査に参加する機会を得たエン・ゲヴ遺跡からの出土土器群を比較し、キンネレット湖地域の当時の文化的特徴について検討するための手がかりとしたい。

エン・ゲヴとアナファからの出土土器群にみられるキンネレット湖地域の文化

1. エン・ゲヴ遺跡の土器

エン・ゲヴ遺跡は、湖東のエン・ゲヴ川の河口付近に立地する (図 2)。もともとは南北約250m、東西約120m、高さ 3 m ほどの遺跡丘であったが、現在はキブツ (農業共同集落) の建物によって一部破壊されており、組織的な発掘調査が行われたのはそのうちのおよそ800m² にすぎない。

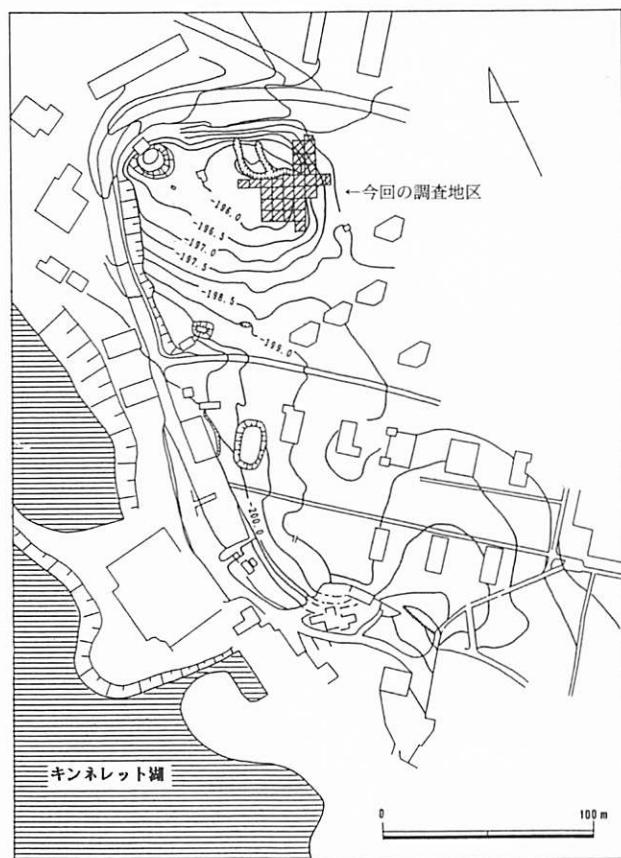


図 2 エン・ゲヴ遺跡の地形とトレーニング配置図
(月本 2000: 70所収 一部改変)

遺跡は、1961年に B. マザールらによって短期の調査が (Mazar et al. 1964)、1990年～1992年、1998年～1999年には日本聖書考古学発掘調査団によって組織的な発掘調査が行われた²³⁾。文化層は鉄器時代で 2 層、ペルシャ時代から初期ヘレニズム時代で 1 層²⁴⁾、後期ヘレニズム時代で 1 層、後期ヘレニズム時代～ローマ時代で 1 層検出されている。

最上部には、後期ヘレニズム時代からローマ時代の遺構が若干見られるが、搅乱が著しい。さらに、遺跡の裾野に現在の建物が建てられているため、町全体のプランは確認できない。しかしながら、テルの西側から東側へ放射状にのびる長細い部屋と矩形の部屋を南北に並べた様子が伺え、町のプランがペルシャ時代から初期ヘレニズム時代にかけてのものを踏襲していることがわかる。遺物としてはガリラヤ式長頸壺など若干のローマ時代の遺物を含むが、その他は後期ヘレニズム時代のものである。多くは、碗、皿、壺、水差し、といった日用品で、調理用具は少ない。碗の中には、恐らくギリシャから輸入されたであろうメガリアン・ボールも数点出土している。また、香油などを入れて用いたと思われる小型の瓶も数点出土している。第 2 層でも若干のガリラヤ式土器 (キャセロール、調理用具) が出土しているが、その他は、碗、皿、壺、小水差しといつ

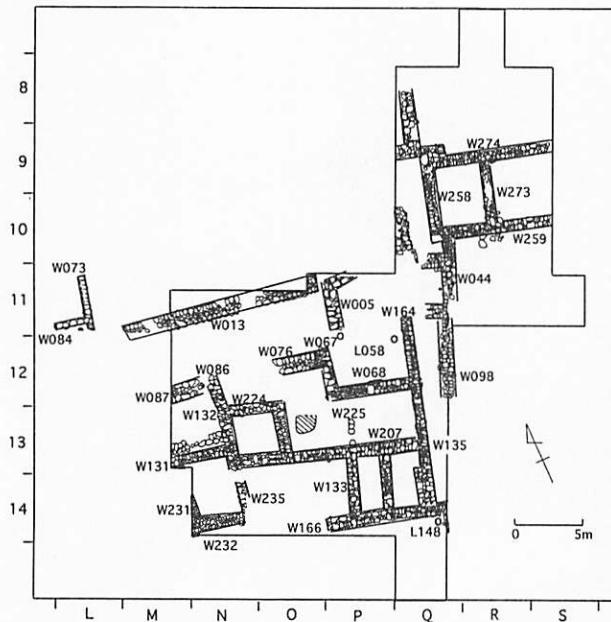


図3 ペルシャ時代～ヘレニズム時代の遺構平面図
(月本 2000: 86所収)

た食器類が多く出土している。また、ロードス・アンフォラが1点出土しており、これはワインなどの輸入に用いられたと考えられる。

ペルシャ時代からヘレニズム時代の遺構として残されていたのは、主として煉瓦づくりの壁を支えていた石の基礎部である(図3)。建物全体の主軸は東西南北の方位にほぼ沿っており、それ以前の鉄器時代の遺構とは若干主軸がずれている。しかしながら、鉄器時代の壁を構成する玄武岩の一部を再利用しながら建てられていた部分も見つかっていることから、ペルシャ時代から初期ヘレニズム時代にかけての人々が、ここへやってきて町を築いた時には、ある程度、鉄器時代の町が土に埋もれており、鉄器時代の都市プランをそのまま踏襲できるような状態ではなかったものの、鉄器時代の石列の一部を新たな町の基盤や礎石の材料として利用していたことがわかる。ペルシャ時代の遺構としては、直径約1.8m、深さ約2 mの大型土坑も1基検出された。

ペルシャ時代から初期ヘレニズム時代の土器の一部は図4に示したとおりである。鉄器時代末から存在するキンネレット湖地域特有の土器で、赤茶色から黒色のまだらな彩色を施したスパッター彩色土器(Spatter Painted Ware)²⁵(図4-17, 21～24)、焼成がやや甘く厚手の灰色もしくは緑がかった白色を帯びた外観で、地中海沿岸部の砂と貝殻を混ぜた胎土を特徴とするフェニキア白色土器(Phoenician White Ware)²⁶(図4-28～32)、比較的柔らかく、淡黄色からピンク色の粉っぽい感触の素地と地中海沿岸部の砂と貝殻を混ぜた胎土を特徴とするセミファイン

土器(Semi-Fine Ware)²⁷(図4-18, 19)、灰褐色の薄く堅い素地を特徴とするグリッティー調理用器(Gritty Cook Ware)(図4-15～16)、フィッシュ・プレート(25)を含む皿といった日用品が出土している。その他、アンフォラ、レバノン・トランスポート(図4-1～3)と呼ばれる交易用の大型貯蔵壺、キプロスから輸入されたと思われる壺(図4-13)、小水差しやカップといった小型の容器の一部と思われるものも出土している。これらのうち、交易に用いられた大型の貯蔵壺やフェニキア白色土器は、その後の時代にはみられない特徴といえる。

2. テル・アナファ遺跡の土器

キンネレット湖地域の文化的特徴を探るうえでもうひとつ有効な資料は、テル・アナファ遺跡からのものである(Herbert 1994, 1997)。アナファは小規模な遺跡ながら、1968年の発掘以来、大量のペルシャ時代からローマ時代にかけての土器が出土し、S. ウィンバーグやS.C. ヘルバートの指揮のもとにそれらのすべてが破片にいたるまで保存された。そして、A. ベルリン(Berlin 1997)によって詳細な調査・研究が行われた結果、この時期のキンネレット湖地域の遺物研究を行うための最もまとめた資料となっている。

報告書では、土器全体が胎土と外観上の特徴によつていくつかのカテゴリーに分類されている。地元で製造された土器としては、セミ・ファイン土器、フェニキア白色土器、スパッター彩色土器、グリッティー料理用器の他に、明い赤色から褐色で、表面がざらざらした感触の比較的薄い調理用器であるサンディー料理用器(Sandy Cook Ware)²⁸、暗灰色から赤褐色で薄手の素地を特徴し、ゴラン高原の玄武岩製粘土から作られたブリック・クッキング・ファブリック(Brick Cooking Fabric)がある。

ペルシャ時代から初期ヘレニズム時代では、こうした地元で生産された土器やフェニキア製の土器が多く出土する。それらは日常で使用される碗、皿、壺、水差しといった器種がほとんどで、全体に、例えば地中海沿岸部で見られるような国際的都市のものとはかけ離れた素朴なものである。ベルリンは、この時期のアナファが肥沃で水に恵まれた地の利を生かした街道沿いの隊商都市の一拠点だったと推測している(Berlin 1997: 18-19)。

ヘレニズム時代中間期を経て後期ヘレニズム時代になると、東地中海地域(アンフォラ、東部シギーラタB)、ナポリ湾地域(イタリア黒色陶器: Italian Black Glaze Ware)、エトルリア、北イタリア(イタリア薄地土器: Italian Thin Walled Ware)、ペルガモン、キプロス、シリア、エフェソス、クニドス(東部陶器、灰色土器: Eastern Glazed Ware, Grey Ware)といった地域からの出土品が多く見られ、東地中海地域との広い交易関係を示している。

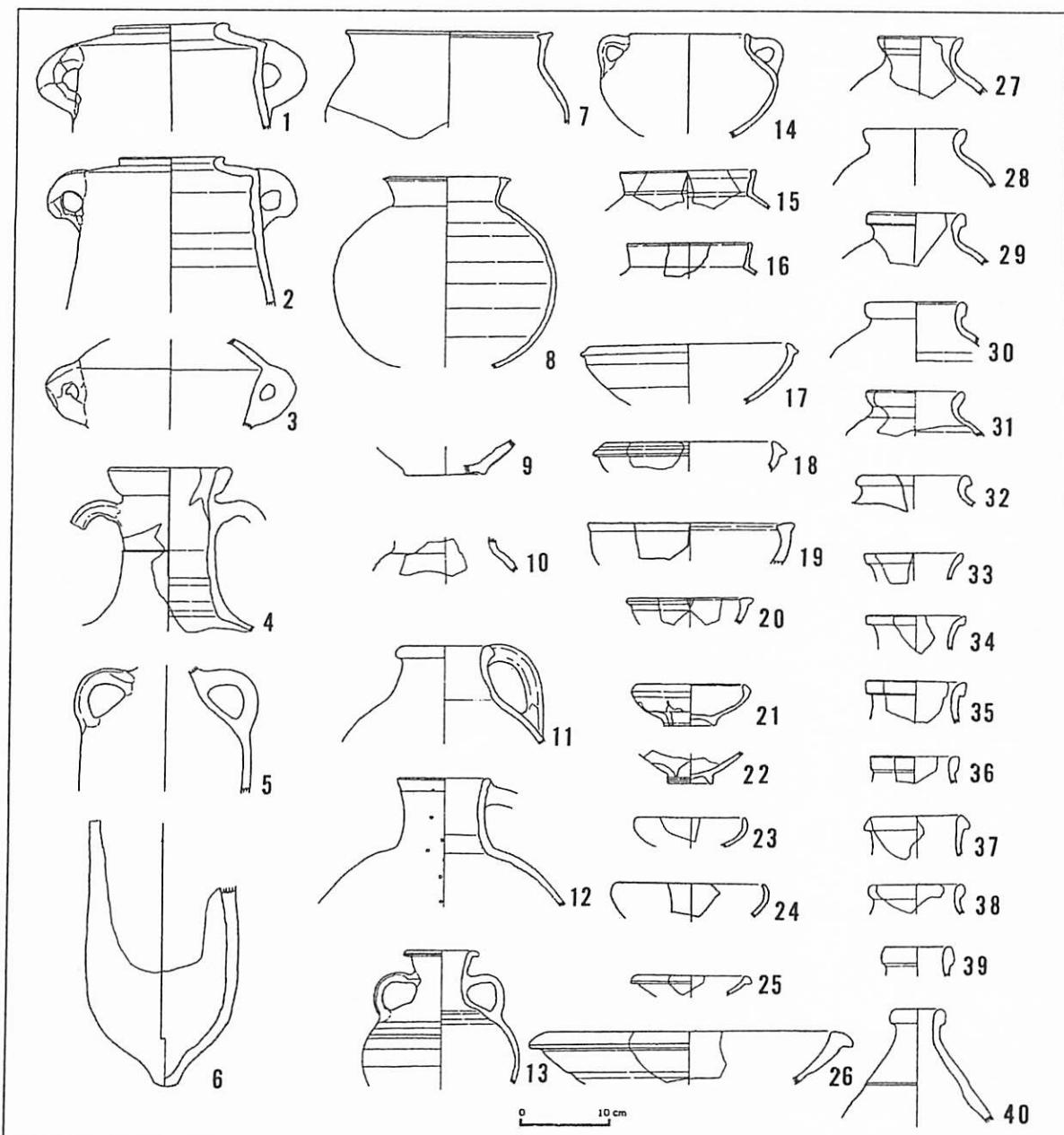


図4 エン・ゲヴ遺跡から出土したペルシャ時代から初期ヘレニズム時代の土器

しかしながら、主体となるのは初期と同様に多くのフェニキア土器や土着のフラ土器で、キンネレット湖以南の地域との共通性はない。器種としてはキャセロール、料理用器、皿、そして蓋付きのフライパンといった調理用具が最も多い。このことからベルリンは、この時期のアナファがフェニキアの隊商を相手にした食堂のような機能をもった施設だったと推測している (Berlin 1997: 20-29)。

3. エン・ゲヴ遺跡とアナファ遺跡からの出土土器群の比較

エン・ゲヴとテル・アナファにおける土器群の出土状況を比較したのが図5である。ペルシャ時代からローマ時代

にかけての土器を種類別に分類し、アナファで出土したものについては細線で、エン・ゲヴから出土したものについては太線でそれぞれ記している。この図から以下のようなことが言える。

まず第一に、ギリシャ、キプロス、イタリアといった地中海、エーゲ海地域からの多様な輸入品が出土するのは後期ヘレニズム時代に入ってからである。このことは、いわゆるギリシャ・ヘレニズム化が後期ヘレニズム時代に顕著となることを示すものといえよう。一方、ペルシャ時代から初期ヘレニズム時代では、若干のキプロス・アルカイク水差し (Cypro-Archaic Import Jug)、フェニキアに由来

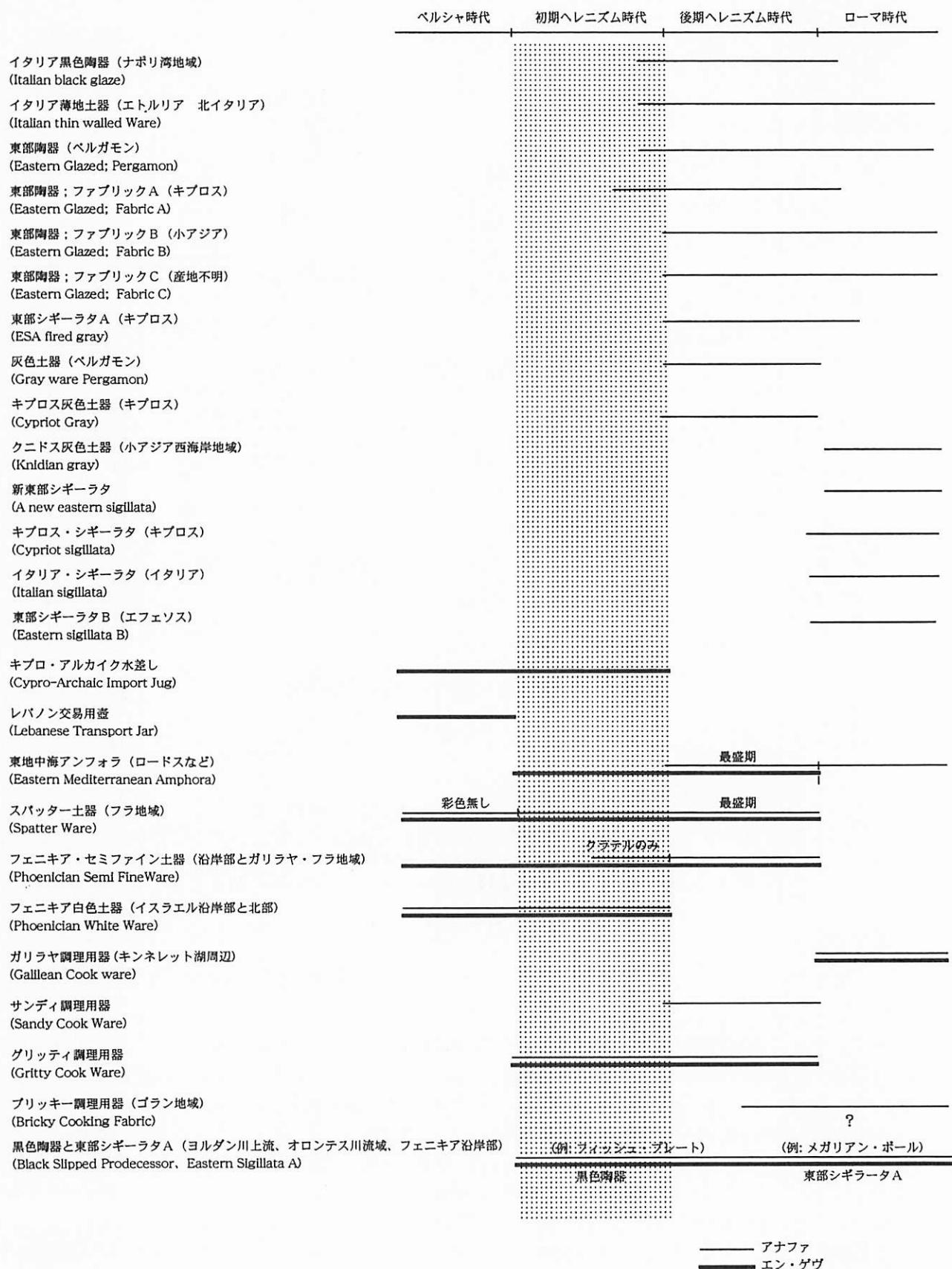


図5 エン・ゲヴ遺跡とアナファ遺跡からの出土土器群の比較

するフェニキア・セミ・ファイン土器 (Phoenician Semi Fine Ware)、フェニキア・白色土器 (Phoenician White Ware)、レバノン交易用壺型土器 (Lebanese Transport Jar) が出土している。また、ヘレニズム時代全般を通して東地中海地域のアンフォラ (Eastern Mediterranean Amphora) が出土している。これらのうち、セミ・ファイン土器とフェニキア白色土器は、既述のとおり主として日常で使用されるクラテルや煮炊用の調理用具、碗、皿、壺、水差しといった器種で構成されており、フェニキア人が実際にこうした地域に植民、もしくは短期的に滞在していた証拠であると考えられている。これに対し、それ以外の出土品は実際にワインなどの輸出入に用いられた大型の土器で、特にエン・ゲヴからはペルシャ時代から初期ヘレニズム時代にかけてこうした土器が出土している。こうしたペルシャ時代から初期ヘレニズム時代における遺物の出土パターンは、ヘレニズム時代の萌芽期に両遺跡においてフェニキアを中心とした活発な交易活動が行われていたことを示すものといえよう。

次に、遺跡の性格の違いである。エン・ゲヴとアナファの遺物を比較して最も大きく異なる点は、アナファで後期ヘレニズム時代以降にエーゲ海や地中海世界、小アジア、イタリアといった広範囲な地域からの輸入品が出土しているのに対し、エン・ゲヴではロードス・アンフォラの他にフィッシュ・プレートやメガリアン・ボールが僅かしか出土していないことである。エン・ゲヴから出土したフィッシュ・プレートやメガリアン・ボールについての胎土分析は行われていないが、外観からはテル・アナファからも出土した、ヨルダン川上流、オロンテス川流域、フェニキア沿岸部といった近隣地域を産地とする東部シギーラタ A に酷似している。従って、エン・ゲヴの遺物にアナファほどの広範囲な交易活動が行われた形跡を見ることはできない。一方、エン・ゲヴでは、ペルシャ時代から初期ヘレニズム時代にかけてキプロス・アルカイック水差しと共にレバノン・トランスポーテーと呼ばれる交易用の大型壺が数点出土しており、いわゆるヘレニズム時代の萌芽期ともいえるこの時代にフェニキアを含めた交易活動が行われていたことを示している。他方、この時期のアナファでは交易に使われたと思われる土器は見られず、むしろ日常用のフェニキア土器が多く出土している (Berlin 1997: 18-19)。

むすびにかえて

以上のように、ペルシャ時代から初期ヘレニズム時代の南レヴァントにおいて、遺跡が集中する地中海沿岸地域とキンネレット湖地域は、フェニキアの強い影響下にあった。遺物にギリシャ世界からの多種多様な輸入品が含まれるようになるのは、特にキンネレット湖地域では、そののちの

後期ヘレニズム時代であり、同時に南レヴァント全域に遺跡が広がる。このことは、南レヴァントのヘレニズム化にフェニキアが関与していたことを暗示している。

ドール、アナファ、エン・ゲヴを比較すると、地中海沿岸地域とキンネレット湖地域ではフェニキアとの関わりに違いがある。第一に、ドールの出土資料が早い時期より輸入品を多く含むのに対し、アナファ、さらにエン・ゲヴのものは全体における輸入品の割合は後期ヘレニズム時代よりも前では少なく、逆にアナファ、エン・ゲヴではフェニキアタイプの日用品が多く見られることである。第二に、ドールが防御設備、ワインプレス、倉庫を備えた都市であるのに対し、アナファやエン・ゲヴはそうした施設は確認されていないことである。こうしたことは、地中海沿岸地域が地中海交易の場であったのに対し、キンネレット湖地域は内陸の交易ルートを行く隊商たちの拠点、言いかえればクレンゲルが述べたようなフェニキアの後背地として利用されたことを示している。

フェニキアにとってのキンネレット湖地域の重要性は、穀物の栽培に非常に適した肥沃な農耕地に加えて、東はダマスカスを経由してシリア・メソポタミアへ、西は地中海方面へ、北はレバノン、南は死海を経由してアカバ湾へと、東西南北へ交通路を開けていた点であろう。先に述べたセミファイン土器は、後期ヘレニズム時代のテル・アナファ、テル・エル・ワウヤット、ダン、そしてキンネレット湖周辺では、ホルヴァト・カナフ、エン・ゲヴから出土しており、これらの地点を結ぶと、フェニキア地域からヨルダン川を南方へ下り、キンネレット湖を通じて南のベト・シェアンや東のアッコ方面へ繋がるルートの存在が示される。こうした状況が、アカバ、紅海を通じた内陸ルートの拠点としてキンネレット湖地域を利用しようとするフェニキア人にとって好都合だったのだろう。

実は、キンネレット湖地域の居住の変遷を長期にわたって概観してみると、そこには他の南レヴァント地域とは異なる特徴がいくつか認められる。第一には、特定の都市が長期にわたって積み重なり遺跡丘を形成するのではなく、比較的短期間の居住に利用され、時代によって遺跡の分布地域が変化することである。第二に、本稿で問題とした時代のように、通常は居住活動の衰退期といわれる時代であっても、遺跡の集中地域となる点である。このため、キンネレット湖周辺では古来よりほぼ絶え間ない²⁹⁾居住活動の形跡が見られる。第三に、初期青銅器時代のベト・イエラハの穀物倉庫や鉄器時代のハダール、キンロット、エン・ゲヴの倉庫が示すように、それぞれの時代を代表するいくつかの遺跡に、他の南レヴァント地域では大規模な都市遺跡にしかない商業的な性格が見られる点である。

これらを総合すると、キンネレット湖がいかなる時にも

自立的な居住活動を可能とするほど十分に豊かな環境を人間に提供しながらも、一旦、湖が国際的なネットワークの拠点となると、通商の拠点としての都市を成立させ、周辺の遺跡を管理下に置きながら交易の要として機能する。そうしたキンネレット湖地域特有の柔軟性のある居住パターンを考えることができる。ペルシャ時代から初期ヘレニズム時代とは、まさにこの地域における交通路としての要求が高まった時代であり、その後の南レヴァント全体のヘレニズム化を推進するきっかけとなった時代なのである。

註

- 1) 文部省科学研究費補助金による国際学術研究として、大阪府立弥生文化博物館の金閥恕及び立教大学月本昭男の指揮の下、1999年までに4期の調査が行われた。筆者は研究分担者として全期に参加した。
 - 2) 通常、キンネレット湖地域（ガリラヤ湖地域）とは、西はアッコやゼブロンのある地中海沿岸平野まで、南はイズレルの谷、北はリタニ川、東はキンネレット湖までをさすが、本稿では、キンネレット湖を中心とし、北はダン、南はベト・シェアン、東はゴラン高原、西は地中海沿岸平野のやや東側までを含む地域とする。
 - 3) 最終的な報告書は印刷中である (Stern, E. et al., *The Excavations at Tel Dor, Areas A and C. Qedem* (Reports of the Institute of Archaeology of the Hebrew University). Vols. I and II)。本稿では、Stern 1994 を参考にした。
 - 4) 前掲3) : 157-164, 213-221. ヒュボダムスとは、紀元前5世紀のミレトスに実在し、都市計画の理念について初めて記した人物の名にちなんだものである。このプランは直行する道路でいくつにも仕切られた矩形プランで、居住区、公共区などと、機能によって区切られている。テルアハワム、シクモナ、テル・メガディムでも出土しているが、最も良い例がこのドールである。これまでその起源とされていたのは紀元前4世紀のオリュントスであったが、ドールで発見された最古のヒュボダムスプランは紀元前6世紀末に遡る。このことは、ドールをはじめとしてヒュモダムスプランが各地に広がった可能性を示している。
 - 5) 初期のものには魚の模様が描かれており、皿の中程に魚料理を供するのに適したくぼみが施されていることから、フィッシュプレートと呼ばれる。当初は黒色陶器であったが、やがて釉薬は使用されなくなり、光沢のない黒色塗料が使われるようになった。紀元前2世紀には赤色が一般的となり、ギリシャや東地中海地域の広範囲で生産されるようになった。
 - 6) 赤茶色の釉薬をかけ、表面には雌型を使う浮彫押印法によって動植物や幾何学模様が施されている。アテネを起源とするが、やがてエーゲ海の島々やシリアのアンティオキア、エジプトのアレクサンドリア、そして南レヴァントでも生産されるようになった。紀元前2世紀には赤色塗料が一般的となり、それらは主としてキプロスで生産された。
 - 7) アテネのアクロポリスの西側斜面で発見されたので、このように呼ばれる。紀元前4世紀から紀元前1世紀頃まで使用され、東地中海沿岸部を含む多くの地域で生産された。
 - 8) 「小さな像で飾られた土器」を意味する。ヘレニズム時代末に現れ、ローマ時代では帝国全体に広く輸出された代表的な陶器である。それ以前の黒色浮彫装飾陶器を継承して紀元前30年頃にイタリアのアレツィオやポッツォリで作られ初め、その後は紀元20年頃に南フランスやライン・モーゼル地方で作成された。皿、鉢、碗、水差しなどの食器が多く、押印によって植物や小動物の文様が施される。
- 9) 列柱式建造物の解釈については、Herzog 1973; Holladay; 小川 1998; Herr 1998; Kochavi 1998a 参照。
 - 10) 第1層がペルシャ時代から初期ヘレニズム時代とされている。遺物としては土器の他にティルスで鋳造されたアブダシタルトの治世（紀元前370年-紀元前358年）の貨幣や、同じくティルスで鋳造され初期ヘレニズム時代のものと同定されたアッティク基準の貨幣も報告されている (Stern 1982: 8)。
 - 11) 初期青銅器時代 III 期の層の上層からヘレニズム時代の建築物が発見されている。北に3棟の長方形の広間、南に矩形の部屋を配した150m²ほどの建造物である。出土資料は、東部テラ・シギラタ (Eastern Terra Sigillata) や把手に印章を押したロードス・ワイン壺などといった若干の輸入品を含むものの、大半はローカルなものであった。印章に彫られた僧侶パウサニアスの名とヘリオスの像や壺の作者の名から、紀元前220-210頃のものと考えられている。さらに、プトレマイオスI世の名前を記した、即ち初期ヘレニズム時代の貨幣も出土しているが、これが実際に初期ヘレニズム時代に使われていたのか、それともたまたま長期にわたって残されていたのか明確ではない。これらの層はヘレニズム時代と一括されており、初期と後期の明確な分類はされていない (Yogev and Eisenberg 1985)。
 - 12) 鉄器時代第I期の上層よりペルシャ時代から後期ヘレニズム時代の土器片が発見されている。主な遺構はヘレニズム時代の塔で、この付近からは、ティルスで鋳造されたアンティオコスVII世の銀貨（紀元前130年頃）やスタンプ付きの把手などの後期ヘレニズム時代の遺物が出土している (Ma'oz 1985)。
 - 13) 中期青銅器時代第II期の上層で、ペルシャ時代から7世紀までの連続した居住跡が見つかっている。ヘレニズム時代に広範囲な交易活動が行われていたことを示す遺物が出土しているようだが、詳細な報告はされていない (Loffreda 1985)。
 - 14) 卵形に掘り抜いた洞窟遺跡（洞窟A）からヘレニズム時代、ローマ時代、初期ビザンチン時代の遺物が出土した。さらに後期ペルシャ時代（紀元前4世紀後半）の坑道付き堅穴墓（洞窟B）から頭部のない一体の人骨と、貯蔵壺、ランプ、瓶、おそらくキプロスから輸入されたものでフェニキアとのつながりを示唆する小型アンフォラ、銅製のクラテルが埋葬品として出土した (Syon 1998)。
 - 15) ベト・シェアンの北東部に隣接する遺跡で、後期ヘレニズム時代の建築物と東部テラ・シギラタやコス島やロードス島から輸入されたワイン・アンフォラ、フィッシュプレートなどの遺物が検出されている。さらに、W地区では後期青銅器時代と初期青銅器時代第III期の層に挟まれた初期ヘレニズム時代のものと思われる床面が確認されている (Mazar et al. 1964)。
 - 16) 第8層でペルシャ時代の文化層が、第7層でヘレニズム時代の文化層がそれぞれ検出されている。D地区のペルシャ時代では、炉と石組みを備えた土床が2面、そしてこれらと関連する石壁として鉄器時代の石壁に修復と変更を加えたものが出土している。E地区のペルシャ時代の層でも2つの建築面が検出されており、下層では大きな石による舗装道路ときちんと組み立てた石壁の一部が見られ、上層では大きな中庭にいくつかの炉と石組み、モルタル、多数の獸骨が発見された。ヘレニズム時代では、D～E地区において中庭を取り囲む2列の部屋と塔やその他の部屋が検出された。この層はさらに2つの層に分類され、初期ヘレニズム時代の壁はペルシャ時代の壁の上部に建てられていた (Onniv et al. 1996: 10-11)。

- 17) ペルシャ時代からヘレニズム時代にかけての建築物の一部と遺物が検出された。建築物は厚さ0.8m~1mの壁で、東西約50m、南北約80mを囲んだ矩形の部屋で、その内側中央付近で大型土坑が1基発見された。部屋の南東部では、さらに2つの小部屋を並べた建築物が見つかった。ペルシャ時代の遺物としては、この時代で典型的なモルタリアや碗、調理用具、肩部がまっすぐな貯蔵瓶、また、紀元前5世紀後半に鋳造された2枚の銀貨が報告されている。貨幣は、初期ヘレニズム時代のプトレマイオス王朝時代の2枚の青銅貨幣と1枚の銀貨が、後期ヘレニズム時代のセレウコス王朝時代の青銅貨幣が11枚出土しているが、貨幣のすべてはティルスで鋳造されたものであった。さらに、エポニモス・アキダモス (Eponymos Archidamos) (紀元前180年頃) の名を押ししたロードス・アンフォラの把手も出土したことが報告されている (Smithline 1997)。
- 18) 遺跡は、初期青銅器時代の後、しばらく居住活動がとぎれ、鉄器時代第II期に再び人が住み始め、以降、初期ローマ時代にかけての5層が堆積している。このうちペルシャ時代は第3層、初期ヘレニズム時代から初期ローマ時代は第2層で、第2層はさらに4つの居住層に分類されている。ヘレニズム時代の最も初期の証拠としては紀元前4世紀半ばの黒色アテネ土器 (Black Athenian Pottery)、オイルランプ、そして貨幣が報告されている (Arav and Freund 1995, 1999)。
- 19) 初期青銅器時代第II期からムスリム時代にいたる居住の跡が明らかにされた。このうちペルシャ時代からヘレニズム時代では、8つの文化層が認められ、日用品を中心とする大量の土器が出土した (Herbert 1994, 1997)。
- 20) 岩盤の上部で、ヘレニズム時代の平面が8.8m×11.4mを計る塔を含む城壁の一部が検出された。この壁は2つの時期に分類され、双方とも切石を長手に並べ自然石を内側に詰めて構築したものであったが、上の層からは後期ヘレニズム時代の土器が、下の層からは連続する建物の床面からプトレマイオスII世 (紀元前3世紀半ば) の貨幣や初期ヘレニズム時代独特の粗野な貯蔵壺が出土した。遺跡全体の年代は初期ヘレニズム時代から初期ローマ時代と報告されている (Adan-Bayewitz and Avi'am 1998)。
- 21) ダンでは、紀元前10世紀からローマ時代末まで継続した祭祀活動が行われた。ペルシャ時代末まで続いたある建物からは、エジプト、キプロス、フェニキア沿岸部で広く信仰されていた出産の守護神、ベス神を含む多くの小像が出土した。ヘレニズム時代には建物の配置が大きく変わり、祭壇や水槽などの施設を含むおよそ2m幅の入り口を持つ切石を積み上げた壁で囲まれた矩形の祭祀所が構築された。少なくとも2層が発見されており、プトレマイオスII世 (紀元前3世紀半ば) の貨幣を含む初期ヘレニズム時代から後期ヘレニズム時代にかけての土着の土器や輸入品が出土した (Biran 1994: 214-227)。
- 22) ペルシャ時代から初期ヘレニズム時代については出土物のみ報告されている。中期から後期ヘレニズム時代に新たにギリシャの神を祀る祭祀所となつた (Tsaferis 1992; Ma'oz 1993)。
- 23) 詳細な調査内容については、Kochavi 1989, 1993, 1996, 1998a, 1992; 日野 1994; 牧野 1995, 1997; 置田・日野 1999; Sugimoto 1999; 小川 1998; 月本ほか 2000 参照。
- 24) 1990年度から1992年度の調査ではヘレニズム時代の建物が2期、ペルシャ時代は大型土坑が1基のみと報告された。しかしながら、1998年度の調査では、ヘレニズム時代の下にもう1層の床があり、さらに鉄器時代の上層列柱式建物の破壊の跡にこれを基礎にした建物の痕跡があり、両者がペルシャ時代の土坑とともに一体のものかもしれないと報告された。本稿では、両者がペルシャ時代の土坑とともに一体のものであるとの前提のうえで、これとヘレニズム時代の下層をペルシャ時代～初期ヘレニズム時代と (第3層) ととらえている (月本ほか 2000: 56-57, 85-89)。また、本文中の図4に提示した資料はエン・ゲヴ遺跡で高低差が比較的少なく、なおかつ攪乱をあまり受けていないQ11-14地区以西のスクエアにおける層序の観察によって抽出された資料の一部で、大型土坑からの出土品は1-2, 4-5, 8, 10-13, 37-38, 40である。尚、98年から99年の資料が未整理なため、ここでは92年までの調査による資料のみを分析対象としている。
- 25) ただし、彩色のないものもあり、特にヘレニズム時代よりも古いものは無彩色である。このため、ペルリンはあくまでの胎土の質で見分けるべきとしている。後期ヘレニズム時代のはじめに最も一般的となり、ローマ時代はじめに減少する。
- 26) 時期によって器形は異なるが、いずれも装飾がほとんど施されず、唯一、小水差しに赤色の帶模様が描かれる。ペルシャ時代のフェニキアの後背地とイスラエル沿岸部と北部に分布が見られる。
- 27) イスラエル、レバノン、フェニキアの沿岸部とガムラ、フルバト・カナフ、エン・ゲヴといったフラ湖地域に分布する。
- 28) フラ湖地域やゴラン地域とは異なる胎土が使用されている。紀元前2世紀末頃に一般的に使用されていた。
- 29) ただし、中期青銅器時代をのぞく。

引用文献

- Adan-Bayewitz, D. and M. Avi'am 1998 Yodefat-1993-1994. *Excavations and Surveys in Israel* 18: 16-18.
- Albright, W. F. 1960 *The Archaeology of Palestine*. Harmondsworth, Penguin Books.
- Arav, R. and R. A. Freund (eds.) 1995 *Bethsaida. A City by the North Shore of the Sea of Galilee*, Vol. 1. Kirksville, Missouri.
- Arav, R. and R. A. Freund (eds.) 1999 *Bethsaida. A City by the North Shore of the Sea of Galilee*, Vol. 2. Kirksville, Missouri.
- Ben-Efraim, I. 1998 Central Golan Heights, Survey. *Excavations and Surveys in Israel* 18: 5-6.
- Berlin, A. M. 1997 The Plain Wares. In Herbert 1997, ix-246.
- Berlin, A. M. 1997 From Monarchy to Markets: The Phoenicians in Hellenistic Palestine. *Bulletin of the American School of Oriental Research* 306: 75-88.
- Biran, A. 1994 *Biblical Dan*. Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Garfinkel, Y. (ed.) 1999 *The Yarmukians - Neolithic Art from Sha'ar Hagolan*. Jerusalem, Bible Lands Museum.
- Gutmann, S., A. Segal, Y. Patrich, D. Wagner and Z. Yavor 1991 Gamla - 1987-1988. *Excavations and Surveys in Israel* 9: 9-13.
- Herbert, S. C. (ed) 1994 *Tel Anafa I*, Vols. 1-2. Michigan, Kelsey Museum of the University of Michigan.
- Herbert, S. C. (ed) 1997 *Tel Anafa II*, Vol. 1. Michigan, Kelsey Museum of the University of Michigan.
- Herr, L. 1988 Tripartite Pillared Buildings and the Market Place in Iron Age Palestine. *Bulletin of the American School of Oriental Research* 272: 47-67.
- Herzog, Z. 1973 The Storerooms. In Y. Aharoni (ed.), *Beer-Sheba I*, 23-30. Tel-Aviv, The Sonia and Marco Nadler Institute of Archaeology, Tel Aviv University.
- Holladay, J. S. 1986 The Stables of Ancient Israel. In L. T. Geraty and L. G. Herr (eds.), *The Archaeology of Jordan and Other Studies*, 103-166. Berrien Springs, Andrews University Press and

- Institute of Archaeology.
- Kalmachter, E. 1998 Southern Golan Heights, Survey 1993-1994. *Excavations and Surveys in Israel* 18: 7-8.
- Kenyon, K. M. 1960 *Archaeology in the Holy Land*. London, Ernest Benn.
- Kochavi, M. 1989 The Land of Geshur Project: Regional Archaeology of the Southern Golan (1987-1988 Seasons). *Israel Exploration Journal* 39: 1-17.
- Kochavi, M. 1993 The Land of Geshur Project: Attempting a New Approach in Biblical Archaeology. In A. Biran and J. Aviram (eds.), *Biblical Archaeology Today 1990, Proceedings of the Second International Congress on Biblical Archaeology, Jerusalem June 1990*, 725-737. Jerusalem, Israel Exploration Society and Israel Academy of Sciences and Humanities.
- Kochavi, M. 1996 The Land of Geshur: History of a Region in the Biblical Period. *Eretz-Israel* (Aviram volume), 184-201 (in Hebrew with English summary, 200-201). Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Kochavi, M. 1998a The Eleventh Century BCE Tripartite Pillar Building at Tel Hadar. In S. Gitin, A. Mazar and E. Stern (eds.), *Mediterranean Peoples in Transition: Thirteenth to Early Tenth Centuries BCE*, 468-478. Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Kochavi, M. 1998b The Ancient Road from the Bashan to the Mediterranean. In T. Eskola and E. Junkkaala (eds.), *From the Ancient Sites of Israel. Essays on Archaeology, History and Theology in Memory of Aapeli Saarisalo (1896-1986)*, 25-48. Helsinki, Theological Institute of Finland Iustitia Supplement Series.
- Kochavi, M., T. Renner, I. Spar and E. Yadin 1992 Rediscovered! The Land of Geshur. *Biblical Archaeology Review* 18/4: 30-44, 84-85.
- Koucky, F. L. 1987 The Regional Environment. In S. T. Parker (ed.), *Roman Frontier in Central Jordan*, Part I, BAR International Series 340, 11-40. Oxford, Archaeopress.
- Loffreda, S. 1985 Kefar Nahum. *Excavations and Surveys in Israel* 4: 58-59.
- Ma'oz, Z. 1985 Horvat Kanaf. *Excavations and Surveys in Israel* 4: 57.
- Ma'oz, Z. 1993 Banias, Temple of Pan - 1993. *Excavations and Surveys in Israel* 15: 1-7.
- Mazar, A. 1990 *Archaeology of the Land of the Bible 10,000-586 BCE* (English edition). New York, Doubleday.
- Mazar, B., A. Biran, M. Dothan and I. Dunayevsky 1964 'EIN GEV Excavations in 1961. *Israel Exploration Journal* 14/1-2: 1-49.
- Mazor, G. and R. Bar-Nathan 1998 The Bet She'an Excavation Project 1992-1994. *Excavations and Surveys in Israel* 17: 7-36.
- Nun, M. 1993 *Ancient Stone Anchors and Net Sinkers from the Sea of Galilee*. Kibbutz Ein-Gev, Tourist Department and Kinnereth Sailing Co.
- Onn, A., R. Greenberg, I. Shaked and Y. Rapuano 1996 Tell el-Wawayat (Tel Tannim) 1993. *Excavations and Surveys in Israel* 15: 10-12.
- Rostovtzeff, M. I. 1941 *The Social and Economic History of the Hellenistic World*, Vol. 1. Oxford, Oxford University Press.
- Slane, K. W. 1997 The Fine Wares. In Herbert 1997, 247-406.
- Smith, R. H. 1990 The Southern Levant in the Hellenistic Period. *Levant* 22: 123-130.
- Smithline, H. 1997 Sasa (west). *Excavations and Surveys in Israel* 16: 20-22.
- Stern, E. 1982 *The Material Culture of the Land of the Bible in the Persian Period*. Warminster, Aris & Phillips Ltd.
- Stern, E. 1994 *Dor. Ruler of the Seas*. Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Sugimoto, T. 1999 Iron Age Pottery from Tel En-Gev, Israel: Seasons 1990-1992. *Orient* 34: 1-21.
- Syon, D. 1998 Migdal Ha-'Emeq. *Excavations and Surveys in Israel* 18: 33-34.
- Tsaferis, V. 1992 The "God who is in Dan" and the Cult of Pan at Banias in the Hellenistic and Roman Periods. *Eretz Israel* 23: 128-135.
- Watzinger, C. 1935 Denkmäler Palästinas II. Leipzig.
- Weksler-Bdolab, S. 1998 Tel Nov. *Excavations and Surveys in Israel* 18: 8.
- Yogev, O. and E. Eisenberg 1985 Beth Yerah. *Excavations and Surveys in Israel* 4: 14-16.
- 小川英雄 1998 「エン・ゲヴ出土の列柱付き建造物について」『オリエント』41巻1号 48-64頁。
- 置田雅昭・日野 宏 1998 「イスラエル エン・ゲヴ遺跡」『考古学研究』45巻3号 95-99頁。
- クレンゲル, H. (江上波夫・五味 亨訳) 1983 『古代オリエント商人の世界』山川出版社。
- 月本昭男・山内紀嗣・市川 裕・名取四郎・佐藤 研・置田雅昭・桑原久実・牧野久実・日野 宏 2000 「イスラエル国ガリラヤ湖周辺の宗教文化についての総合研究」『平成10~11年度文部省科学研究費補助金(基盤研究A2)研究成果報告書』。
- 日野 宏編 1994 『高原と湖の遺跡—古代エン・ゲヴの発掘調査』天理大学。
- 牧野久実 1995 「ヘレニズム時代のエン・ゲヴとその周辺—人の営みと湖」『史学』65巻1・2号 109-124頁。
- 牧野久実 1997 「ペルシア時代のエン・ゲヴ」『史学』66巻2号 153-168頁。

牧野久実
滋賀県立琵琶湖博物館
Kumi MAKINO
Lake Biwa Museum